



タイトル **北緯 66.6°**
北欧ラップランド歩き旅

著 者 森山伸也 (もりやま しんや)

出 版 社 本の雑誌社

発 売 日 2014 年 10 月 25 日

ページ数 239 ページ

著者はフリーランスライター（著者によると、自転車操業的零細自営業のライター）で、本書は自身初の単行本である。著者の現在は、大学時代の探検部の延長線上にあるようだ。

2008 年はノルウェーとスウェーデンとフィンランドに ^{またが} 跨る北極圏トレイル 450 キロを歩き、2009 年にはスウェーデンの道なきサーレク国立公園を 100 キロほど歩いている。その後、2010 年には、北極圏トレイルの半分 400 キロとクングス・レーデン総延長 450 キロを繋げた 850 キロを二ヶ月かけて踏破している。

2011 年は東日本大震災のため国内に足を踏み留め、北海道の山で我慢し、2012 年は、山村への引っ越しで海外遠征はお預けとなる。2013 年は、旅の舞台をラップランドからアイスランドへ移し、北海岸から南海岸へトレイルや道なき火山地帯を繋げて 300 キロを踏破する。……。

著者は、北欧のラップランドを 4 回にわたって旅した訳だが、本書は 1 回目と 2 回目の歩き旅をまとめたものである。

さて、本書のタイトル「北緯 66.6°」とは「北回帰線」のことである。すなわち、著者がラップランドを訪ねた時期は、ちょうど夏至を少し過ぎた頃で、白夜に近い頃である。



評者も、30 代の半ば、かつてノルウェーのオスロ（北緯 60°）に 10 月～12 月までの 3 ヶ月間仕事の関係で滞在したことがある。朝は午前 9 時ごろ日が昇り、太陽は地平線を這い、午後の 2 時過ぎには日没という毎日であった。暗いうちに仕事に出かけ、深夜帰宅（ホテルに帰る）という感じのする毎日だった。毎日太陽を浴びて生活していた者にとっては苦痛以外の何ものでもなかった。北欧の人達が夏を恋い焦がれるのも十分理解できる毎日であった。

さて、さっそく目次を見てみよう。

はじめに ———— なぜ、ラップランドなのか？

第1部 北欧ロングトレイル

北欧で一番長い山道

とにもかくにも地図探し

北欧三国跨ぐトナカイとおれ

スポンジ跳び箱地獄からの脱出

トレイルが人を連れてくる

白夜が育てたマメ

ナメクジ地図の正体

荒野の友を食べる

ミッコのオートミール

第2部 踏み跡なき荒野へ

またしてもラップランド

オオカミの棲むサーレクへ

持ち主を失った登山靴

やめ！北極の風

ザックに眠る三冊の本

ひりひりと焦げる本能

あとがき

本書の内容を一言で言ってしまうと、「誰もいない、山小屋もない、情報も少ない、とてつもなく広い荒野のラップランドを 30 代の男が単独で、ぶらっと 40ℓのリュック一つで歩きに行った」という話である。

本書を読むにあたって、帝国書院の標準高等地図を持ち出し、スカンジナビア半島の地図とにらめっこしながら筆者の道程を追いかけたが、本書に記されている地名は幾つかを除いてほとんど見つからなかった。さらに、Google Earth でもラップランド地方を覗いてみたが、地形は大体分かったものの地名はほとんど判らず、地名については標準高等地図と大差はなかった。

さて、筆者はまず「北極圏の荒野で生きるために何は必要か？ などは、その大地に身を置いて見なければ判らない、あれこれ考えてもしようがない」と、想像できる範囲で装備を整え、とっとと北極圏へ飛ぶという大胆さだ。

最初に入国したフィンランドのヘルシンキで北極圏トレイルの地図を探すべく悪戦苦闘

する。北極圏トレイルの総延長は 800 キロで、ノルウェー領を 380 キロ、スウェーデン領を 350 キロ、フィンランド領は 70 キロの行程である。

現地の地図がなければ何事も始まらないので、ヘルシンキでスカンジナビア三国のラップランドの地図を探す。ところが、フィンランドとスウェーデンのものは入手出来たが、ノルウェーの地図がない。つまり、総延長の $380/800 \approx 1/2$ の地図を入手できないことに気付く。ノルウェーの地図が無ければ何も始まらないので、ノルウェーの地図が置いてある可能性が高いと思われるキルピスヤルビへ向かう。ヘルシンキからキルピスヤルビまでは、鉄道とバスで北へ走り、距離にして 1200 キロ、金額にして約 2 万 5 千円、時間にして約 20 時間かけてキルピスヤルビに到着する。ノルウェーの地図は無事ゲットできたが、北極圏トレイルの北端カウトケイノからキルピスヤルビまで約 200 キロ間の地図だけが揃わなかった。

「なんでトレイル中継点の村にトレイルの地図が置いてないのだ。バロー (バカヤロウ)。ヤル気あるんか」と悪態をつく。

「もう何でもいいから、とにかく俺を目の前に広がる荒野へ早く放ってくれ！」とキルピスヤルビから 40 キロを超えるザック (容量 80ℓ : 全装備が p/39~p/41 にリストアップされているが大荷物である) を背負って歩き始める。とはいっても、出発前の地図を見ながら装備や食料の最終確認は怠らない。

さすが北極圏だ。風が冷たい。気温は摂氏 5°C くらいだろうか。フリースの上にレインウェアを着て、耳当ての付いたニット帽をかぶり、手にはグローブをはめる。

俺はついにラップランドの荒野に立ったのだ。世界地図が頭の中にバサッと広がった。あのヨーロッパの上にあるザリガニのハサミのようなカタチをしたスカンジナビア半島の付け根あたりに俺は確かに立っているのだ。というところから過酷な歩き旅が始まる。著者の興奮がじわじわと伝わってくる。

場所は北欧フィンランドとノルウェー、スウェーデンに跨るツンドラ地帯。その全長 800 キロに及ぶ山道を、ひとりで歩く、北極圏トレイルである。

過酷な歩き旅なので、綿密な計画のもとに周到な準備で出発するに違いない、と思いきや、その辺りはいささかいい加減である。「まずは行っちゃえ」というところから始まる。しかし、場所は歩いたことがない北極圏である。あらゆる最悪の事態に備えて色々準備は整えている。

雄大な自然の中に身を置く素晴らしさは勿論だが、トラブルも後を絶たない。疲労と空腹。厳しい寒さ。襲い掛かる蚊の大群。消えるトレイル (踏み跡)。岩の上に置かれている持ち主のない色あせた男物の「ケイランド」というイタリア製の有名ブランドの登山靴に仰天する筆者。シューズに入った水をそのままにして歩き続けたため、皮膚が濡れてふやけ、これが擦れて右足の踵に出来たマメに悩まされる (著者は白夜が育てたと皮肉る)。

しかし、どんなアクシデントも、大げさな書き方はせず、「んにゃろっ、ガッツがあれば

旅は続けられるぞ」と笑いを滲にじませる。そこで、著者がポジティブシンキングを発揮する姿は頼もしい。

旅は二度に渡るが、「痛い目にあって身体で感じ取った知識、経験こそがホンモノなのである」と、主張する著者は、失敗を存分に楽しんでいるように見えて、いっそう爽快である。

天候の悪化で、テントでの生活が長引くと、退屈な時間こそが、長期徒歩旅行の核心だという。何もすることが無くなって、強制的に自分と真正面から向き合う時間を与えられるからである。それは、忙しい日常生活や一般的な旅行ではなかなか得られない時間でもあるからだ。

日本は世界に誇る美食大国だ。しかし、そんな食文化の豊かさはこの荒野では何の価値もなく、むしろマイナスだ。

そうか、だから北欧の探検家は強いのかも知れない。ナンセンやアムゼン、ハイエルダールは、世界規模の食糧流通や冷凍保存技術がないあの時代に、長期保存がきく限られたものだけを食べて大冒険を成功させている。普通の食生活で、乾いた肉やチーズ、ジャガイモなどを食べなれていたし、レパートリーの少ない食事にも不満を抱かなかったから冒険を成功に導けたのかも知れない。食文化が豊かなことは、決して喜ばしいことばかりではない。贅沢な食生活に慣れてしまうと、旅先でも旨いものを口にしたくなる。その食欲が満たされないと歩く意欲を削がれたり、気分が沈んだりする。グルメ人間は不幸である。食べ物に無関心な人ほど荒野を歩く旅の素質を持っているということだ。……。

著者の装備品をながめていると GPS (Global Positioning System: 人工衛星を利用した位置情報計測システム) が目についた。山に GPS を持ち込むことには、賛否両論がある。否定派の意見としては「命の危険があってこそ冒険である」とか「GPS が邪魔して本来の自然と対峙出来ない」などという理由があるようだ。「今回の歩き旅では、初めて歩く北極圏だし、天気も地形も、遭難時の対応もうまくイメージ出来ないし、現地の言葉も話せないので一応持ってきた」という。「トレイルが雪に埋まる可能性もゼロではないし、地図を何かの拍子で失うことだって有り得る。GPS を持って山を歩く利点が、現在地確認の他にありとすれば、今回のように新たな世界へチャレンジする精神的余裕を与えてくれることだ。GPS があるからあの氷河を登ってみようとか、河を渡ってショートカットしてやろうというフィールドをみる視野が広がって、行動の選択肢が増える。逆に言うと、GPS がないと始終守りの姿勢になって踏み跡にがんじがらめに縛られてしまう可能性も高くなる」。……。

それにしても著者はビールをこよなく愛している。というのも、文中いたる所に次のような言葉が乱れ飛ぶからである。

「コンビニで買った缶ビールをプシュッとやった」、「ベッドの上でビールをグビグビしながら」、「グビッと一口飲みたい」、「もうすぐキンキンに冷えたビールが待ってるかんね」、「街にいるのにビールが飲めないという激しいストレス」、「たとえそれが味気ない第三のビールだとしても、プレミアムモルツ並みの輝きを放って、喉をシュワシュワさせる。そして、頭をふらふらっと揺さぶる心地良い酔いが、美しい自然をより際立たせていく」、「今なら生ビール、二千円で買うぞ」、「水を入れるだけでビールが出来る、粉末ビールを誰か開発してくれないか」。北欧のビールはアルコール度数 2%、普通のビールは 5%だから飲んでも全然酔わないと愚痴る。……。

「もっと山へ。自然へ行け」と本能が叫ぶ。日本の山を二、三日歩いただけでは、その警報は一向に止むことはない。しかし、ラップランドではたった一日歩いただけで、その胸騒ぎは収まった。

著者は、歩くことは誰にも邪魔されず、考え続けることだという。これからも山村の暮らしをザックに詰め込んで、やたらめったらとあちこち歩いていく所存であるという言葉で本書を閉じている。

著者が走破した村や街、山や川の名前と位置をラフな形でもいいから記載されていれば、読者は、著者と一緒に並んで旅が出来たかもしれない。しかし、これらが無かったため、時々置いてきぼりを食い荒てて追いつくということが多々あった。著者は地図を探すのに苦労した割には、読者がその分け前に預からなかったのは残念だ。この点では読者は消化不良を起こしたはずだ。

読後感は爽快であった。評者が知らない世界がそこにあった。著者は、自分が何をしたいのか、そして何が出来るのか。このロングトレイル中毒患者は自分の頭で考え、それを自覚している。単独行の事故は、致命的な結果を招くことが多いという。しかし著者は、死なない程度に、或いは遭難一歩手前で失敗することも大事であるという。

経験と価値観を共有できる仲間、弱点を補える仲間がいれば歩き旅ももっと楽だったかも知れない。本書には、ヒグマは登場しなかった。ヒグマに遭遇し、命を落とした探検家も少なからずいる。それでも、単独行は魅力たっぷりだ！

2014. 12. 28